

ヨハネによる福音書が記す受難物語は初代教会に広く流布していた伝承とヨハネ独自の伝承とに基づくものと思われます。この福音書の受難物語は、共観福音書と異なり、自ら進んで苦難を引き受けていく、力強い神の子イエスの姿を描いています。イエスがユダが知っている所へ行ったということは、逃げるために行ったのではないということです。ここにも苦難を自ら引き受けようとするイエスの姿を強調する著者の意図が示されています。2 節の「裏切ろう」の直訳は「引き渡そう」です。イエスを捕えに来た人たちが武器を手にしていたことは、イエスを恐れていたことを示しています。イエスは自分の方から一歩進み出て、「誰を捜しているのか」と尋ね、彼らは「ナザレのイエスだ」と答えると、「わたしである」と言いました。この言葉によって、イエスは「私はあのモーセが会った神さまと一つであり、私は神さまと共にずっとあり続ける者であり、あなたがたとずっと共にある者なのだ。」と宣言したと記すのです。この言葉に捕えに来た一隊は後ずさりして、地面に倒れました。それはイエスの逮捕という出来事においても人間には何の力もないことを示唆しているのです。共観福音書では弟子たちは自分の方から逃げ出したと記されていますが、この福音書では 8 節の「この人々を去らせなさい」という言葉により、イエスが弟子たちを逃げさせたと記すのです。そしてシモン・ペトロが、自分の剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかって、その右耳を切り落としました。人物をペトロとマルコスに特定しているのはこの福音書だけです。この伝承が伝えられる過程で、不明瞭な事柄が具体化されていったことを示していると考えられています。11 節に、ペトロを諫めるイエスの言葉が記されています。「剣をさやに納めなさい」という言葉は、この福音書ではイエスが神さまの意思に進んで身を委ねる姿を表現する言葉になっています。著者は、イエスのこれから臨もうとする苦難を「父がお与えになった杯」と表現し、「父がお与えになった杯は、飲むべきではないか」と記して、イエスは神さまの計画に深い信頼を示し、神さまの意思に従う決意を表明するのです。さらに、この言葉には、それを弟子たちも受け入れていくように、というイエスの思いが込められているのです。14 節で、カイアファは、自分ではそれと知らずに、神さまに用いられて、「一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だ」とイエスの死の意味を語ったのだと記し、著者はイエスに敵対する者たちの行動もまた、神さまの意志に基づいていることを主張するのです。著者は、イエスと一体である神さまが、受難の出来事を、この後、粛々と進められていく、と記すのです。